

# 日本古代学研究の世界的拠点形成

平成26年度(2014)～平成30年度(2018)

私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

(課題番号 S1411022)

## 研究成果報告書

令和元（2019）年5月

学校法人名 学校法人明治大学

大学名 明治大学

組織名 日本古代学研究所

研究代表者 石川 日出志

(明治大学文学部教授)



## はじめに

本書は、平成26年度（2014）～平成30年度（2018）私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「日本古代学研究の世界的拠点形成」（課題番号S1411022）の研究成果報告書である。

近年、学術はどの分野においても研究の細分化傾向がますます顕著となり、共同研究であってもその傾向は明瞭で、各自が専門とする領域を越えて連携する研究の実践は難しくなっている。しかし一方では、20世紀末から文理融合型の研究の促進も叫ばれており、様々な取り組みが模索されている。私たち明治大学で歴史学・文学・考古学3分野で日本古代史を専門とする研究者も、各自が専門とする分野の研究を深化させることは当然ではあるとしても、それだけではなく、それぞれの特性を活かしつつ連携を重ねることを通じて刺戟しあい、研究視野を広げる取り組みが必須であると考えようになった。そこでまず、2004年度から文部科学省学術フロンティア推進事業「日本古代文化における文字図像・伝承と宗教の総合的研究」（研究代表者：吉村武彦2004～2008年度）、次いで、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「日本列島の文明化を究明する古代学の総合化研究」（研究代表者：吉村武彦2009～2013年度）により、学外の研究者の協力を得ながら歴史学・文学・考古学・民族学・民俗学などの諸分野の共同による研究活動を始動し、継続してきた。

これら一連の共同研究は、学際性ととともに国際性をキーワードとするが、活動を重ねる中で、学際性という語はすでに長い歴史をもつものの、研究者それぞれがよって立つ分野どうしの連携という色合いが強いと感じるようになった。そこで、各研究者が自らの専門分野とは異なる、あるいは隣接する分野の視点や研究手法を取り入れることが必要であると考え、学際性という語に替えて複眼性（的）の語を用いるようになった。また、こうした取り組みが将来にわたって継続する仕組みづくりも必要であると考え、大学院教育にも反映させるために2004年度から博士後期課程で歴史学・文学・考古学3分野共同による科目〈文化継承学〉の運営を開始した。次いで2008年度から文部科学省大学院教育改革支援プログラム「複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム」によって、博士前期・後期課程を通じてフィールド調査を取り入れた複眼的研究者育成プログラムを始動し、2011年度からは明治大学独自予算で現在まで継続している。こうした研究と教育の両輪体制での活動のもうひとつのキーワードである国際性については、日本古代社会を理解するには東アジア各地との交流史と比較研究が必須であることから中国・韓国・台湾・ベトナム諸国の研究者および組織との研究交流を重ね、またアジア圏とは異なる視野・視角からの研究手法と成果に学ぶ必要から欧米の研究者と議論する機会を積み重ねてきた。

本研究は、こうした10年来の活動の蓄積に基づいて、日本古代学 연구를複眼的に進めながら、その国際性をより確固たるものにするを目的に準備・計画したものである。そこでは、これまでのアジアと欧米の研究組織・研究者と協同する機会を拡充するのはもちろんのこと、それらを基盤としながらも研究組織・研究者どうしを結ぶ〈線の集合〉であるだけでなく、共同研究が双方向かつ複合する、いわば〈重層的なネットワーク〉を構築する仕掛けが必要であった。そこで注目したのが、明治大学が所蔵する日本古代学研究関係資料群である。明治大学には、博物館や図書館を

はじめとして多様な研究資源・文化資源が所蔵されているが、今回特に焦点をあてたのが考古学の杉原荘介、古代史学の井上光貞、民族学の岡正雄の3名の研究者が残した資料群である。杉原荘介（1913－1983）は、戦前に独学で考古学の世界に入り、戦後は明治大学で考古学専攻の立ち上げと運営に尽力するとともに、日本考古学界の組織化に大きく貢献した。井上光貞（1917－1983）は、日本古代史、特に律令制の成立過程の研究等に指導的な役割を果たした。岡正雄（1898－1982）は戦前にウィーン大学で学位を取得し、帰国後、日本民族学の構築に尽力した異才の人物である。杉原は没するまで戦後長らく明治大学文学部で教鞭をとり、岡も5か年明治大学政治経済学部の専任教授をつとめ、井上も数年文学部の兼任講師を務めた。戦前から戦後へと日本社会が大きく変貌する中で、いずれも日本における考古学・古代史・民族学が学問的成長を遂げる過程で大きな貢献を果たした人物である。明治大学が所蔵する3氏関係資料は多彩な内容を含むが、戦前から戦後にかけての日本古代学研究の展開を考察する上で重要な資料を含んでいる。これら明治大学が所蔵する日本古代学関係資料をデータベース化し、法律的な条件を満たす資料についてはデジタル公開することを通して、日本古代学研究の土台を再検証するとともに、今後は従来よりも飛躍的にオープンな形で共同研究を可能とする環境を整えたいと考えたのである。

本報告書は、その5か年に及ぶ研究活動の総括報告であり、Ⅰ～Ⅳの4部構成とし、それにⅤに研究成果・実施記録等の資料を添えた。Ⅰは本研究の目的と意義・計画の概要、Ⅱは「日本古代学研究の世界的拠点形成」の概略、Ⅲではそれに基づく本研究構成員主要メンバーに研究成果の要点を提示し、Ⅳで成果の総括と今後の展望を記した。このうちⅠでは当初の研究計画の概要を示すことを主とし、実施結果・研究成果はⅡおよびⅢ～Ⅴに記した。

本報告では、過去5か年の研究成果の概略が把握できるように構成した。しかし、研究自体は当然ながらわずか5か年で完成する訳ではなく、「日本古代学研究の世界的拠点形成」の第一ステージを達成したにすぎない。しかし、歴史学・文学・考古学・民族学・民俗学の複眼的な研究視野を獲得する試みが一定の成果を上げ、明治大学所蔵資料については古典籍資料を含めたデジタル化を達成し、海外の研究組織・研究者との研究交流もほぼ毎年開催することが定式化してきている。今後、「日本古代学研究の世界的拠点形成」の第二ステージに向けた着実な取り組みが求められるが、それは私たちが独力でできることではない。まさしくグローバルに双方向の共同研究が恒常化する条件が整えられるよう、日本および世界の日本古代学研究に携わる方々・諸組織のご支援を賜りたい。

最後になりましたが、本研究実施期間中、国内外のきわめて多数の方々・組織にご支援・ご協力を賜りました。本研究メンバーを代表して、厚く御礼申し上げます。

(研究代表者 石川 日出志)

## 目 次

はじめに .....	i
目 次 .....	iii
I. 研究プロジェクトの立案と趣旨 .....	1
1. 研究プロジェクトの目的と意義 .....	1
2. 研究プロジェクトの計画 .....	2
3. 研究組織 .....	5
4. 研究施設・設備等 .....	8
II. 研究成果（1）日本古代学研究の世界的拠点形成 .....	9
1. 日本古代学研究の世界的拠点形成の概略 .....	9
2. 明治大学所蔵日本古代学研究資料群の文化資源化 .....	10
3. 源氏物語の注釈・講義録の文化資源化 .....	18
4. 海外の研究組織・研究者との研究交流の恒常化 .....	28
III. 研究成果（2）日本古代学研究の実践 .....	35
1. 井上光貞の業績と『令集解』研究 .....	吉村 武彦 35
2. 杉原荘介が日本考古学界に果たした役割 .....	石川日出志 42
3. 「漢委奴國王」金印—真贋論争から璽印考古学へ— .....	石川日出志 42
4. ユーラシアにおける交易網の復元と技術移転—金属器及び玉類の分析と文化資源化— .....	中村 大介 63
5. 寺院資料および文芸から探る古代の心性 .....	牧野 淳司 71
6. 『萬葉集』を用いた古代心性研究 .....	山崎 健司 83
IV. 成果と今後の展望 .....	石川日出志・加藤友康・牧野淳司・吉村武彦 94
V. 研究成果一覧 .....	104
1. 雑誌論文 .....	104
2. 図書 .....	108
3. 学会等発表 .....	109
4. シンポジウム・公開研究会等の実施状況 .....	113
5. 関連事業 .....	119
6. 明治大学日本古代学研究所ホームページ .....	126

# I. 研究プロジェクトの目的と意義

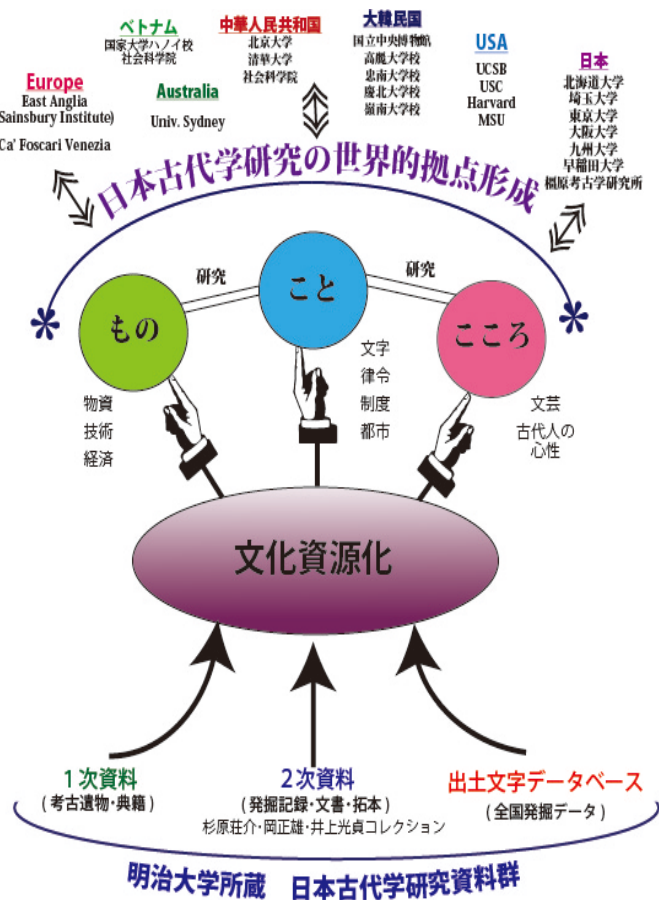
## 1. 研究プロジェクトの立案と趣旨

本学は、これまで考古学・古代史・古代文学研究で学術貢献するとともに、人材育成の点でも実績を誇る。2004（平成16）年に古代学研究所を設立して日本古代学の総合化を推進し、分野横断的研究には10年の実績がある。2008～10（平成20～22）年度には文部科学省大学院G Pの支援を得て「複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム」により、教育との連携も蓄積してきた。

本研究の目的は、明治大学が10年来継続してきた学際的・国際的視野に立つ日本古代学研究に立脚し、本学所蔵の研究資料群（杉原荘介・岡正雄・井上光貞コレクションなど）を活用するとともに、新たな世界的研究拠点を構築することにある。これまでの蓄積に基づくとともに、新たに民族学・法制史学研究も踏まえて拡充を図る。上記の研究資料群を文化資源化するとともに、すでに公開中の出土文字データベースをさらに充実させてデジタル公開し、「もの」（物資・技術・経済）、「こと」（文字・律令・制度・都市）、「ところ」（文芸・心性）の3つの側面（テーマ1～3）から日本古代学の国際的構築をめざす。図書館・博物館との連携のもとに文化資源としてのデータベースの構築を進め、それを基盤とする研究を蓄積し、国内外の研究機関・研究者と協同して、日本古代学研究の国際的研究拠点の形成を目指す。日本古代学研究の世界的研究拠点到る。

明治大学では、弥生時代研究を牽引した杉原荘介、日本民族学の創始者といわれる岡正雄、日本律令学を主導した井上光貞の、発掘記録、図書、資料など、日本古代学研究の資料群を所蔵している。これらは、主に戦後の日本古代学研究の基盤を構成する重要資料であるにもかかわらず、未整理であるために、これまであまり活用されてこなかった。これらの資料群を文化資源としてデータベース化することにより、日本古代学の再編成、究極的には脱構築の切り口とする。

これらの文化資源をデータベース化して世界に発信しつつ、韓国・中国・ベトナムなどアジアの古代学資料群にも目を向け、その特質を世界的視座から考察することで、日本古代学の特質を析出する。同時に、明治大学日本古代学研究所の活動のなかで10年来の連携実績のある学外、およびアジア・欧米の研究機関・研究者の協力を得ることができる。おもに、「もの」（物資、技術、経済）、



【 図 I-1 本研究の構成模式図 】

「こと」(文字・律令・制度・都市)、「ところ」(文芸・心性)の3つの側面から日本古代学にアプローチし、「複眼化」(学際化・複合化・国際化)を図る。

本プロジェクトは、明治大学所蔵の日本古代学研究資料群を活かしつつ、海外の研究者との連携・協同による国際的研究を進めることにより、日本古代学研究の国際的ハブとしての世界的研究拠点を構築するものである。

## 2. 研究プロジェクトの計画

### (1) 3つのテーマ研究部門

研究目的を実現するために、日本古代学研究所(明治大学国際日本古代学研究クラスター)を核として、明治大学専任教員および外部研究機関の研究者により、(1)「もの」(物資・技術・経済)の研究、(2)「こと」(文字・律令・制度・都市)の研究、(3)「ところ」(文芸・心性)の研究、の3つの研究部門(テーマ1~3)を構成する。3部門協同で、日本古代学研究資料群の文化資源化(研究基礎資料群の収集・整理・保存および活用のためのデータベース化)を推進し、世界に発信する。そのために、3テーマの学内専任メンバーとPD・RAからなる文化資源化チームを組織する。各テーマには複数の具体的研究課題を設けて分析・検討を進める。

また、各部門で、国内外の資料群調査、およびその比較文化的研究を推進し、国際研究集会等各種の研究集会開催をとおして総合化を図る。これまで連携実績のある学外及びアジア・欧米の研究機関・研究者とも連携を重ねて、日本古代学研究の世界的拠点を形成する。

研究活動については日本古代学研究所ホームページ(<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~meikodai/>)を用いて逐次情報公開する。

各テーマの研究計画は次の通りである。

#### 【テーマ1:「もの」(物資・技術・経済)の研究】

本研究のテーマ1では、(1)3つのテーマ研究の基礎として、明治大学所蔵の日本古代学研究資料群の研究資源化をはかること、およびこれを核として(2)「もの」(物資、技術、経済)の側面から日本古代学の国際的構築をめざす研究基盤を構築する。

(1)の資料群とは、a)考古遺物・除秘鈔(院政期儀式書・室町期写本)など、b)考古学・民族学・日本律令学の学史上重要な杉原荘介・岡正雄・井上光貞資料および好太王碑初期石灰拓本などの拓本類、c)明治大学日本古代学研究所の墨書・刻書土器、文字瓦データベースの3種からなる。(2)では、弥生時代から律令期までの考古学的研究を核としながら、歴史学および理化学的研究を総合し、なおかつアジア諸地域の研究者・組織との連携を強化する。

このうち(1)日本古代学研究資料群の研究資源化に関して、以下の課題を実施する。これについては、東京大学史料編纂所時代に実績のある加藤友康が主担当となる。

- ①. 上記資料群のデジタル撮影(約34,000カット)を行い、デジタルデータの収集と整理を行う。さまざまな属性をもつ資料群ごとに研究資源化のための最適なメタ・データの付与を検討する。
- ②. 日本古代学研究の基盤となるデータベースの構築と管理のためのシステム開発を行う。
- ③. c)では中国・韓国・ベトナム、欧米圏ではアメリカ・イタリア・ドイツ・オーストラリア・ベルギ

一等の研究者を招聘して進めてきた国際的な日本古代学研究所の協同体制をさらに発展させるため、データベースの公開とネットワークシステムを介した国際的レベルでの研究資源の共有と研究を推進する双方向活用システムの開発を行う。

また、(2)「もの」(物資・技術・経済)の側面からの日本古代学研究所として次の課題を実施する。

- ①. 日本列島初期農耕社会の地域性とその相関関係の解明。
- ②. 弥生・古墳時代の中央と周縁との政治・社会・経済的関係の解明。
- ③. ユーラシア大陸東部の国家形成期における交易網の復元と技術移転。

日本列島における初期農耕社会の形成から初期国家形成にいたる過程に関する研究は、20世紀後半に理論的・実践的研究は飛躍的に前進した。しかし、ユーラシア東縁にあたる日本列島では、その過程は地域差が顕著であり、諸地域間の政治・経済社会的関係は一系的に捉えることが難しいことも明らかとなっている。弥生時代～律令期の日本列島内資料の分析を進めるとともに、中国・韓国などアジア諸地域の研究者・組織と連携して解明にあたる。

## 【テーマ2:「こと」(文字・律令・制度・都市)の研究】

本研究のテーマ2では、国家形成に伴って本格化する文字の使用、その象徴である古代の統治法＝律令、そして律令法支配にふさわしい都市の誕生と、律令法が実態化する諸制度という「こと」を研究対象とする。古代の文字使用は、統治手段としての律令法に象徴的に現れる。井上光貞の研究は、日本律令学の最高峰の一つであるが、古代学研究所が公開している鷹司本令集解を駆使して律令法制の全貌を研究対象とする。古代の政事は、制度・儀式として習慣化していくが、天下の孤本である儀式書「除秘鈔」の解明・公開は当該研究に限らず、学界に裨益するところがきわめて大きい。文字は、国家機構以外でも、信仰上の意思表示でも使用されるが、古代学研究所が公開している出土文字資料の墨書土器・文字瓦データベースの研究・充実化は、きわめて重要な研究分野である。

テーマ2では、明治大学所蔵日本古代学研究所資料群を活用しつつ、新たな世界的研究拠点を展開するプロジェクトの一環として、特に(1)1次資料である国分寺瓦関係の前場コレクション、院政期の儀式書「除秘鈔」(室町期写本の天下の孤本)、(2)2次資料の好太王碑初期石灰拓本、井上光貞『令集解』関係資料群、(3)そして、古代学研究所が公開している鷹司本「令集解」と、さらに充実化する墨書土器データベース・文字瓦データベース等を活用し、古代国家形成に伴う文字使用の実態と、律令法・制度・都城などの歴史的意義を解明する。具体的には、

- ①. 国家的支配の根幹である養老令(大宝令)の諸規定を、明法家の諸説を集大成した『令集解』から解明する。すでに鷹司本を公開し、また東山文庫本の公開を準備中であり、それらを駆使して解明にあたる。その際、井上光貞による研究(未完成)は、『令集解』解読の大きな手立ての一つであり、日本法制史の研究史上でも重要である。
- ②. 律令法の解明とともに、文書行政とも深く関わる文字使用の実態として、文字自体の研究に取り組む。また、律令制による統治の実態を明白にするため、全国から出土する墨書土器と文字瓦を集成するデータベースの充実化をはかる。人文分野にとって、データベースの構築はそれ自体が重要な研究である。日本で唯一のデータベースの充実化を実現することは、日本史学にとって大きな貢献となる。



- ③. 地域における国家的支配の事実を掌握するため、全国に設置された、国分寺瓦を通じて、各地域の偏差を比較研究する。これは、データベースによる地域的偏差の研究と連動して、律令法による政治基調だけではなく、地域支配の様相と地域実態の多様性を解明するうえで貴重な研究となる。
- ④. 律令制支配を貫徹するには、こうした法制を制度化・儀礼化していく必要がある。天下の孤本である「除秘鈔」の積読文の作成に取り組む。院政期の儀式書の公開は、それ自体として重要である。

### 【テーマ3】：「こころ」（文芸・心性）の研究】

テーマ3では、和歌・物語（歴史叙述を含む）・説話伝承などの諸テキストを分析することで、古代社会における「こころ」の生成様態を解明、記述する。古代社会に生きる人々が、どのような規範・制度を内面化して、いかなる「こころ」の世界を立ち上げたかを、諸テキストとの関わりにおいて解明していく。複雑に展開していく「こころ」（心性世界）の価値体系を反映しつつテキストが生み出されていく様子、また逆に、いったん成立したテキストが「こころ」に及ぼした影響、このような「こころ」と諸テキストとの相互反射的な様態を解明する。文芸テキストが主要研究対象となるが、文学分野に収まり切らない諸資料を積極的に活用することで、古代社会の展開にともなう「こころ」世界の変容を立体的に描き出す。また、アジア諸地域の研究者・組織との連携を強化して、日本古代の特色を考察する。

古代における「こころ」（心性）のあり方を2側面から追究する。（1）物語や伝承など各テキストがいかなる「こころ」の世界を立ち上げているか。民俗学や法制史学の成果を参照しつつ、古代社会における諸々の文化的規範や諸制度の面から考察する。（2）文芸テキストが人々の心性を規制し、変化させていく様を分析する。諸文芸テキストの多くは、権力のもとに成立し、時代を越えて読まれ、「古典」としての地位を獲得する。権威をまとった文芸テキストが人々の価値観に影響を及ぼし、その心性を支配し変化させていく様子を記述する。

総じて、文芸テキストを分析する際には、隣接する韓国・中国・ベトナムの資料群(文物や諸伝承)に目を向け、それらとの比較を通して日本の古代テキストの特質を世界的視座からとらえていく。上記の研究に関わる明治大学所蔵および新たに購入する資料群について利用・活用できる環境を整え、データベース化することで、日本古代心性研究の基盤を整備し、世界に発信する。具体的には以下の研究課題を実施する。

- ①. 文学作品の文字使用と表現：『万葉集』が文字の使用によって、どのような「こころ」の世界を立ち上げたのか。
- ②. 漢字世界としての古代：古代における神話・歴史・歌などの文芸テキスト生成と漢字世界との関わり。
- ③. 日本古代文学と琉球文学の発生：琉球地方の旧記類と口承神歌の文化資源化。口承と心性の継承の研究。
- ④. 王朝物語の構成要素：『源氏物語』が立ち上げた心性世界と、それが後世に及ぼした影響。
- ⑤. 平安時代仏教の研究：平安時代僧伝史料の文化資源化と、仏教テキストの展開と心性の変容研究。
- ⑥. 平家物語とその周辺資料を用いた古代心性研究：『平家物語』に継承された古代の心性の掘り起こし。

以上の個別研究を、アジアを視野に入れて推進しつつ、それぞれの成果を照らし合わせて、古代にお

ける「こころ」の世界の展開と変容を総体的に描き出す。

## (2) 年次計画 (ロードマップ)

本研究の5か年にわたる年次計画 (ロードマップ) の概略は以下の通り定め、計画通り実行した。

研究項目	2014年度		2015年度		2016年度		2017年度		2018年度	
	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月	4~6月	7~9月
テーマ1-(1)日本古代学 研究資料群の研究資源化		杉原・岡・井上資料の資料整理・デジタル複製			除秘鈔・好大王碑拓本製作			杉原・岡・井上資料の管理データ作成・追加		
テーマ1-(2)「もの」(物 資・技術・経路)の側面から 日本古代学の国際的研 究基盤構築		杉原・岡資料の基礎研究			古代東アジアにおける地域性・交易・交流			杉原・岡資料の応用研		古代東アジア:総括研
テーマ2-(1)1次・2次資料 群の古代学上の研究史総 括と課題の提示		国分寺瓦DBの歴史的意 義と課題の提示			井上資料の目録作成・構造			日本古代学研究の国際化研究:日		日本古代学研究国際化:総括
テーマ2-(2)1次・2次資 料群の古代学上の活用					除秘鈔・好大王碑の基礎研					
テーマ2-(3)明治大学所 蔵の日本古代学資料群の 公開と研究					職官令研究の文献目録作成・公開		都市	好大王碑文とヤマト王権の研究		
テーマ3-(1)1次・2次資 料群の古代学上の活用					文芸テキストが立ち上げる「こころ」世界の研究			文芸テキスト「こころ」世界の機能・効果の		
テーマ1・2・3-(1)総括的 研究										
テーマ1・2・3-(2)日本古 代学研究の世界的研究拠 点形成										

\*△印は各年度の研究の総括として実施する国際研究集会<交響する古代>。

## 3. 研究組織

### (1) 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの 役割
石川 日出志	明治大学文学 部・教授	日本列島初期農耕社会の地域性 杉原荘介資料の文化資源化	弥生時代の物資・技 術・集団
加藤 友康	明治大学大学 院・特任教授	平安時代貴族社会と日記 儀式書史料の文化資源化	平安時代の儀礼・都 市
吉村 武彦	明治大学文学 部・教授* <sup>1</sup>	奈良時代の文字使用と律令法 令集解・墨書土器のデータベース化	統治構造と律令法 の研究
佐々木 憲一	明治大学文学 部・教授	古墳時代の中央と周縁 日本古代学研究の国際化	都市・国家と地方支 配
牧野 淳司	明治大学文学 部・教授	東アジアから見た日本の物語と説話 除秘鈔紙背文書の文化資源化	物語・説話を通した 心性の研究
井上 和人	明治大学大学 院・特任教授* 2	中華帝国周縁国家の古代都城の展開過 程—出土建築素材論を視野に入れて—	古代都城と出土資 料論
神野志 隆光	明治大学大学 院・特任教授* 3	漢字世界としての古代 日本列島におけ る文芸—神話・歴史・歌の発見—	古代文芸の生成と 変容
山崎 健司	明治大学文学 部・教授	文学作品の文字使用と表現 萬葉集諸本本文の文化資源化	古代文芸の生成と 心性の解明

湯浅 幸代	明治大学文学部・准教授	王朝物語の構成要素 源氏物語の注釈・講義録の文化資源化	物語と儀礼・心性
居駒 永幸	明治大学経営学部・教授	日本古代文学と琉球文学の発生 琉球地方旧記類と口承神歌の資料保存	口頭伝承と心性
中村 大介	埼玉大学教養学部・准教授	ユーラシアにおける交易網の復元と技術移転 金属器及び玉類の分析と文化資源化	東アジアにおける物資と技術の移動
川尻 秋生	早稲田大学文学学術院・教授	平安時代仏教の研究 僧伝史料の文化資源化	文芸資料と平安時代論
山路 直充	市川市立市川考古博物館・学芸員	品への記録からみた生産と負担 記録製品としての文字瓦の文化資源化	古代の瓦生産と文字

\* 1) 吉村武彦；2017年4月1日退職，名誉教授。 \* 2) 井上和人；2017年3月31日退職。

\* 3) 神野志隆光；2016年3月31日退職。

## (2) 研究組織の体制・運営

### ①. 研究代表者の役割

- ・研究代表者石川日出志は，テーマ1・2・3の各テーマリーダー（石川・吉村武彦・牧野淳司）およびこれらを横断するデータベースシステム構築リーダー（加藤友康）と恒常的に協議し，基本的に全構成員が出席する運営委員会をとおして，研究プロジェクトを統括する。
- ・研究代表者を補佐するため，プロジェクトマネージャー（吉村）を配置する。

### ②. 各研究者の役割分担や責任体制の明確さ

- ・構成員を3つの研究部門に配置し，それぞれテーマリーダー（○印）を置いて統括を行う。また，研究の横断・総合化を図るために，数名は複数のテーマを担当する。その構成は次の通り。  
 テーマ1：○石川日出志，佐々木憲一，吉村武彦，加藤友康，中村大介，山路直充  
 テーマ2：○吉村武彦，加藤友康，佐々木憲一，井上和人，山路直充，川尻秋生  
 テーマ3：○牧野淳司，神野志隆光，山崎健司，湯浅幸代，居駒永幸，川尻秋生
- ・3テーマを横断する文化資源化（データベース）システム構築：○加藤友康，石川日出志（テーマ1），吉村武彦（テーマ2），牧野淳司（テーマ3）
- ・研究組織の構造を模式図で示す。3つのテーマがそれぞれ活動しつつ共同で日本古代学研究を展開する。そして3テーマがそれぞれの資料を文化資源化する活動を通してもう一つの連携の仕組みが機能する。



## 【 図 I-2 3つのテーマ研究と文化資源化 】

### ③. 研究プロジェクトに参加する研究者の人数

・構成員は、学内者10名、学外者2名で組織した。また、前掲構成員のほか、下記の研究協力者の支援を得てプロジェクトを遂行した。

テーマ1：岡正雄資料研究； Josef Kreiner（ドイツ・ボン大学・名誉教授）、山田仁史氏（東北大学大学院文学研究科・教授）、嶋内博愛（武蔵大学人文学部・教授）、山田香織（香川大学、2018年度追手門学院大学基盤教育機構・常勤講師）

テーマ1：蛍光X線分析； 藁科哲男（遺物材料研究所会長／元京都大学原子炉実験所助手）、田村朋美（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室・研究員）、高野陽子（京都府埋蔵文化財調査研究センター）

テーマ2：出土文字資料データベース構築； 市大樹（大阪大学文学研究科准教授）、柴田博子（宮崎産業経営大学法学部教授）、荒木志伸（山形大学学士課程基盤教育機構准教授）

テーマ3：源氏物語研究； 日向一雅（明治大学・名誉教授）

・デジタル化については外部専門業者（ナカシャクリエイティブ社）の支援を受けた。

### ④. 大学院生・PD及びRAの人数・活用状況

・2014年度： 研究支援者1名、大学院生（前期課程・後期課程）アルバイト5名・その他アルバイト1名

・2015年度： 研究推進員（PD）1名、研究支援者2名、大学院生（前期課程・後期課程）アルバイト8名・その他アルバイト1名

・2016年度： RA3名、研究支援者1名、大学院生（前期課程・後期課程）アルバイト12名・その他アルバイト1名

・2017年度： PD1名、RA3名、研究支援者1名、大学院生（前期課程・後期課程）アルバイト7名・その他アルバイト1名

・2018年度： PD1名、研究推進員1名、RA4名、研究支援者1名、大学院生（前期課程・後期課程）アルバイト6名・その他アルバイト1名

### ⑤. 研究チーム間の連携状況

・3つのテーマがそれぞれ日本古代学研究資料群の文化資源化の研究活動に従事するために、3テーマの学内専任メンバーとPD・RAからなる文化資源化プロジェクトチームを組織する。これが、3テーマが常時連携する重要な役割を果たした。

・そして、全体の研究推進を図るために、定例運営会議を年3回開催することしたが、2016年度5回、2017年度からは8～9回開催して連携強化に努めた。また、各プロジェクトはグローバルフロント408B・C・D・Kで並行して研究を遂行しており、相互の情報は日常的に共有・交換できる環境にある。

### ⑥. 研究支援体制

・大学としての組織的支援体制： 明治大学研究・知財戦略機構のもとに、「国際日本古代学研究」クラスターとして位置づけで組織的に研究支援を行う体制で研究を展開した。

- ・大学研究・知財戦略機構の承認のもとに研究推進員・研究支援員を配置し、さらに大学院生・PD及びRAおよび大学院修了相当の研究能力のあるアルバイトによる支援体制を整えた。

#### ⑦. 共同研究機関等との連携状況

- ・共同研究機関との組織的連携の契約は行わない。しかし、蛍光X線分析では、国内では東京大学・岡山大学考古学研究室、奈良県桜井市埋蔵文化財センター、京都府京丹後市教育委員会など、海外ではベトナム歴史博物館・モンゴル科学アカデミー、墨書土器を主とする出土文字史料データベース作成では全国の自治体の埋蔵文化財調査組織との連携・協力が必須であり、その上で分析やデータ収集を行った。
- ・これまで10数年来連携実績のある学外及びアジア・欧米の研究機関・研究者とも連携して、日本古代学研究の世界的拠点形成を進めた。連携研究として重点化する海外の機関としては、高麗大学校、中国社会科学院、南京大学歴史系、南カリフォルニア大学史学科であり、さらにアジア・欧米各地の優れた研究機関・研究者との連携を重ねた。

## 4. 研究施設・設備等

### (1) 研究施設の面積及び使用者数

- ・研究施設とその面積： 日本古代学研究所：明治大学駿河台キャンパス・グローバルフロント8階（408B・C・D・K室）、計150㎡
- ・使用者数： 本研究を構成する研究者12名中10名の学内者が恒常的に使用し、さらに10数名の大学院生・PD及びRAがこの4室で研究支援を行った。

### (2) 主な研究装置、設備の名称及びその利用時間数等

- ・サーバー一式 (Express5800/T102d(6C/E5-2430)・入力PC5台)： 2014年度に設置したサーバー上に、2014年度にデジタル撮影を行なった岡正雄・井上光貞関係資料のデジタルデータ（それぞれ2281コマ、2716コマ）を搭載し、その管理データの作成作業を進めた。以後、2015年度には杉原荘介資料のデジタルデータ（5,755コマ）のサーバーへの搭載を開始し、最終年度までに杉原荘介資料5755コマ、岡正雄資料6,986コマ、井上光貞資料10,281コマ、古典籍画像データ610コマ、総計23632コマのデジタルデータをサーバー上に搭載した。2015年度以降、古代学検索データベースシステムについて、画像データ取得済み分から順次検索項目の検討・設定を行い、検索用メタデータの入力作業を推進して、最終年度にシステム構築を完了した。この間、週2日×12時間×44週を基本として作業を進め、各年度ともサーバー及び入力用PCは毎日稼働する体制をとった。
- ・エネルギー分散型蛍光X線分析装置 (OURSTEX 100FA)： 考古資料は出土した国・地域から移動することは困難なことから、ポータブル型蛍光X線分析装置を用いて国内外の資料所蔵機関で分析することが必要である。2014年度に設置し、機器の調整を重ねた上で、2015年度から本格的に資料測定を開始した。中村大介が担当し、日本で最も分析蓄積のある藁科哲男・田村朋美両氏の研究協力を得て分析を進めた。4か年で国内では明治大学博物館、東京大学・岡山大学考古学研究室、奈良県桜井市埋蔵文化財センター、京都府京丹後市教育委員会など、海外ではベトナム歴史博物館・モンゴル科学アカデミーで、日本の弥生時代および併行期の遺跡出土玉類とガラス製品

の測定を行った。

(石川 日出志)

## II. 研究成果の概要

### 1. 日本古代学研究の世界的拠点形成の概略

本研究における〈日本古代学研究の世界的拠点形成〉に向けた取り組みは、大枠では次の3つのモードから構成されている。

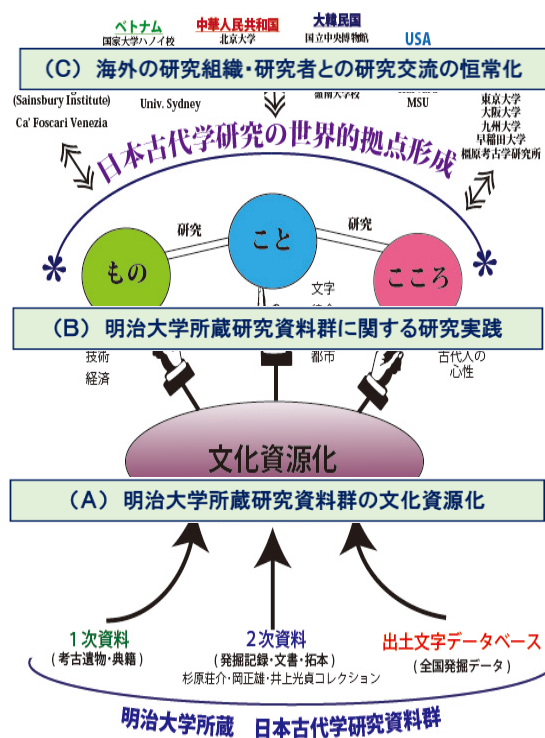
- (A) 明治大学所蔵研究資料群の文化資源化
- (B) 明治大学所蔵研究資料群に関する研究実践
- (C) 海外の研究組織・研究者との研究交流の恒常化

このうち(A)は、本研究のユニークな特色であり、前記のように明治大学が所蔵する杉原荘介・井上光貞・岡正雄が残した考古学・古代史・民族学の3分野の資料群を、今後の日本古代学研究の基礎資料として整理し、法律的な条件が整う資料についてはデジタル公開する取り組みである。〈だれでも〉・〈いつでも〉・〈どこからでも〉明治大学が所蔵する日本古代史関係第1次資料にアクセスできるとによって、世界中のだれもが日本古代学研究の発展過程を研究することを可能とし、それを契機として従来よりもはるかに広範な人々との研究交流を重ねていこうとするものである。

(B)のうち、岡正雄は戦前、ウィーン大学で民族学を学んで学位を取得し、帰国後に日本民族形成史論＝岡正雄学説を提示して、幅広い論議を呼んだことで知られる。ウィーンでの研究だけでなく、日本民族形成史に関して、あるいは岡正雄の諸活動自体が世界の民族学・文化人類学者に注目され続けている。また、杉原荘介は、日本の旧石器時代・弥生時代を理解する上で朝鮮半島から中国大陆に注目して韓国・中国の研究者と、また旧石器時代研究や理化学的年代測定に関して欧米の研究者と積極的に交流を重ねた人物である。戦後日本考古学界で海外との研究交流を早い段階から推進した人物である。岡・杉原の研究活動を追跡する中からアジアと欧米との研究交流が広がる契機となる。さらに、明治大学博物館所蔵『高句麗広開土王碑拓本』や『除秘抄』・『除秘抄附』などの分析を進める。

(C)は、本研究における3つのテーマ「もの」・「こと」・「ところ」の研究の実践を踏まえて、アジアと欧米の研究組織・研究者との研究交流を相互化・恒常化するものである。幸いにもこれまで10数年にわたる海外の諸組織・研究者との研究交流実績があり、明治大学を会場とするだけでなく海外でも共同開催することを積み重ねる。また、私たち本研究メンバー自身が海外で資料調査・研究発表を重ねることも必要である。

これらの取り組みを図示すると右のようになる。以下、本章IIにおいて(A)・(C)を、IIIにおいて(B)の成果の概要を述べる。(石川日出志)



【 図II-1-1 A・B・C 3つのモード 】

## 2. 明治大学所蔵研究資料群の文化資源化

### －「文化資源の研究資源化と統合型検索システムの開発」－

#### はじめに

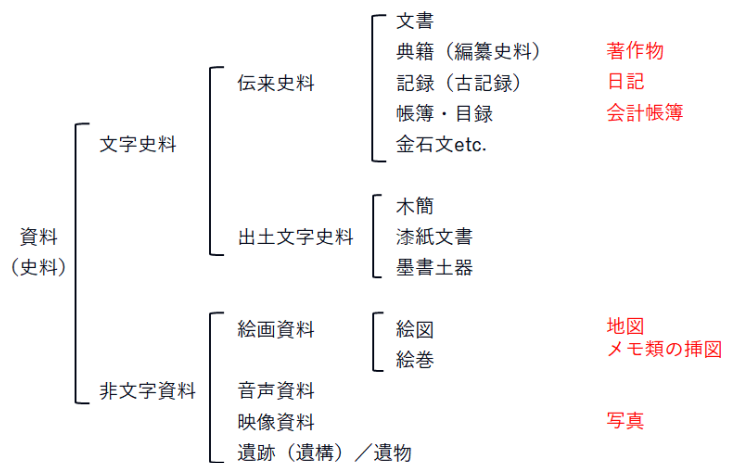
文化資源化とは、現代までに残された「人類の文化的営為」の所産総体と定義づけることができるものであり、その資源化とはそれらを研究の対象として利用可能な形態とすることといえる。とりわけ近年では、コンピュータによる「資源の有効活用」として議論されるようになってきている。

「資源の有効活用」の営みは現代社会におけるそれにとどまらず、前近代社会から一貫してみられる活動である。その一端は、本研究とも関連する国際シンポジウム《交響する古代Ⅶ：2017/01/14》での報告「日本古代における文書整理の営為」で、日本古代における大規模史料群の整理について、史料の生成（生成元での整理を含む）→伝達→整理と保管」という史料のライフサイクルのなかで検討してきた。また、現代に残された「現代人の文化的営為」の所産を文化資源化する課題として、明治大学に関わる3つの大規模資料群を対象にデータベース化による統合型検索システムの構築をはかり、史学指摘総括のために資料群の有効活用に取り組んできた。途中経過については、《交響する古代Ⅷ：2017/12/01》で「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（新大型研究）による統合型検索システムの開発と文化資源化」として報告してきたが、ここでは新大型研究最終年度における到達点の報告と今後の研究への活用について取りまとめを行いたい。

#### （1）文化資源の研究資源化と統合型検索システムの開発の前提

歴史的に生成される文化資源としての各種の資料は、次の図Ⅱ-2-1のように類型化できる。各類型のうち赤字で示したものが、今回対象となる杉原荘介資料・岡正雄資料・井上光貞資料という「現代の資料」のコンテンツである。

新大型研究における杉原荘介資料・岡正雄資料・井上光貞資料という3つの対象資料群の生成者は、杉原荘介（弥生時代研究を牽引した考古学者（1913.12.6－1983.9.1）。東京・日本橋小舟町生まれ。府立三中卒業後、越前和紙を扱う杉原商店を継ぐ。考古学は独学で、家業の傍ら明治大学文科専門部に学び、1943年卒業。戦後、文部省を経て、1948年明治大学助教授、のち教授。静岡市登呂遺跡の組織的調査や日本考古学協会の創設・運営に尽力した。はじめ弥生時代研究が主たる研究分野だったが、1949年の群馬県岩宿遺跡調査以後、旧石器時代も専門とした。）・岡正雄（日本民族学の創始者といわれる民族学者（1898.6.5－1982.12.15）。長野県松本生まれ。松本深志中学校を卒業後、第二高等学校（仙台）を経て、東京帝国大学文学部



【図Ⅱ-2-1 資料（資料）の類型】



を1924年卒業。1929～1935年にウィーン大学等で学び、1933年、Kulturschichten in Alt-Japan（古日本の文化層）でPh.D.取得。1943年日本の民族研究所設立に尽力。戦後、東京都立大学・明治大学・東京外国語大学教授などを歴任。戦中?戦後、日本民族学の基礎を築いた。）・井上光貞（日本律令学を主導した歴史学者（1917.9.19－1983.2.27）。東京・麻布宮前町生まれ。成蹊高校卒業後、東京帝国大学文学部を卒業。東京大学教授・国立歴史民俗博物館長（初代）を歴任。律令制以前の政治社会組織研究、古代仏教思想史とくに浄土教の研究、律令の研究を進める。）の3氏である（紹介文は、「杉原荘介・岡正雄・井上光貞資料データベース」のHP参照）。3氏にかかる発掘記録、図書、資料など、日本古代学研究の資料群であるが、未整理であるために、これまであまり活用されず今日に至っていた。これら資料群を文化資源としてデータベース化⇒日本古代学の再編成、究極的には脱構築の切り口とする（「構想調書」より）ことを目的としたものである。

## （2）データベース構築と標準化

データベース構築にあたっては、データを効率的に管理したり検索したりするためには、メタデータの適切な付与と維持が重要である。図書館情報学の分野における標準化として、ダブリンコア（DublinCoreMetadataInitiativeによって提唱され、2003年にはISO15836[1]及びNISOZ39.85[2]によって国際標準となった）が著名なもので、図書館も蔵書目録はこれによって記述されている周知のことがらであろう。「図書館情報」にとどまらない「歴史」的資料群の資源化（＝標準化）のための方策の必要性も提唱されており、この分野で先駆的な事業を展開してきた東京大学史料編纂所がデータベース構築の経験と中間総括を行ない、歴史知識の共有をめざして歴史情報の文化資源化をはかることを「歴史知識学の創成」として公にされている（横山伊徳・石川徹也 編著『歴史知識学とははじめ』勉誠出版2009年）。同署第10章の討論の中で、「研究資源共有化システム」の問題点として安永尚志氏は次のように発言している。「所蔵資料などに関わるデータベースを除いて、大半が研究機関などに所属する研究者が個々の専門領域で、独自に構築したデータベースである」。そのこともあって、人文科学分野の一般的学術用語や概念をもっていない。史料編纂所・奈良文化財研究所・国文学研究資料館などにみられる研究機関所蔵史料に関わるデータベースとしての一般性・統合性・継続性が重要な課題であるとの指摘である。このことはとくに、データベースの提供者がどのような活用を考慮しているのか、どのような利用・活用の実現をイメージしてデータベースが構築されているのか、データベース構築と検索・閲覧システムの開発をつなぐべき一本の線の重要性の指摘といえる。データベースの標準化の課題といえよう。

また、日本史研究分野の雑誌『日本歴史』は特集「ICT時代の歴史学」を組み（848号 2019年1月）9つの研究機関・史料収蔵機関におけるデータベース事業の紹介とITC化の課題が報告されている。この特集のなかで後藤真氏は、「データの蓄積は単にテキストデータというだけでなく、より歴史学の課題に即したモデルを持ったものになることが望ましい」（『日本史研究と人文情報学』『日本歴史』848号 2019年1月）と指摘し、「それを可能にする技法の一つに、国際標準であるTEI（Text Encoding Initiative）がある（<http://www.tei-c.org/>）。これは、XML形式によって、人文学の課題解決に即した形でマークアップを行うことにより、複雑なテキスト解析を可能にするとともに、国際的にそのデータモデルを共有できるものである。」（同論文4頁）と提言している。

3つの資料群のデータベース構築にあたっては、これらの提言を参考にしつつ、3つの資料群の特性を

踏まえ、日本古代学の再編成、究極的には脱構築の切り口とする利用・活用の実現を検討しつつ作業を行なった。

### (3) データベース構築と杉原荘介資料・岡正雄資料・井上光貞資料の資料形態

本研究においてデータベース構築の対象となる3つの資料群は、その成り立ちも異なり、多様な資料形態をもっており、利用者・利用目的も当然のことながら異なるものである。そのため、①個々の資料群ごとに検索対象となるカテゴリーを当該分野の研究に即して抽出する、②抽出されたカテゴリーを階層化して構造化する、同時に③構造化された各データベースをメタ・サーチ可能とするシステムも構築する、という段階を経ることにした。

検索対象となるカテゴリーは、例えば杉原荘介資料では、次の図II-2-2のように多様な資料形態・内容、テーマ、対象の地域、研究活動の場など多岐にわたっている。

	資料形態	テーマ	テーマ	資料内容	対象地域	関連人物			
日本考古学協会	杉原個人	原稿	日本考古学協会	旧石器時代	土器	日本	北海道地方	北海道	井上光貞
会議資料	日記	原稿コピー	東京考古学会	縄文時代	石器	韓国	東北地方	青森県	岡正雄
写真	写真	論文	第四紀学会	弥生時代	青銅器	中国	関東地方	岩手県	杉原荘介
メモ	手紙	論文コピー	明治大学	古墳時代	鉄器	台湾	中部地方	宮城県	郭沫若
報告書	原稿	校正グラ	考古学陳列館	古代	木器	アジア	近畿地方	秋田県	金元龍
その他	抜刷	書籍	帝室博物館	不明	遺構	ヨーロッパ	中・四国地方	山形県	賈蘭坡
	図面	抜刷	文部省	その他	遺跡	エジプト	九州地方	福島県	金延鶴
	図書	雑誌	出版社		歴史学	アメリカ・カナダ	沖縄地方	茨城県	James B. Griffin
	その他	発表要旨	彌生会		その他学問	アラスカ	不明	不明	考古学者
		書簡類	学問研究		協会	ソ連	なし	群馬県	歴史学者
		書類	授業		行事	シベリア	その他	埼玉県	行政
		書類(和文タイプ)	発掘調査		私信	不明		千葉県	その他
		スクラップ帳	海外		家族	なし		東京都	
		パンフレット	交友		領収・請求	その他		神奈川県	
		写真	市川市		出張			新潟県	
		図面	不明		不明			富山県	
		日記	その他		その他			石川県	
		ノート						福井県	
		メモ						山梨県	
		名簿						長野県	
		名刺						岐阜県	
		新聞記事						静岡県	
		地図						愛知県	
		物品						三重県	
		学内会議資料						滋賀県	
		学外会議資料						京都府	
		不明						大阪府	
		その他						兵庫県	

【 図II-2-2 検索対象カテゴリー 】

これを確定したあと、作業用シートを作成し、資料1点1点ごとデジタル撮影を行ない、生成した画像資料をサーバに搭載し、システム開発も進めた。データベースの構造化は、

◎テーマ：すべて 日本考古学協会 東京考古学会 明治大学 学問研究 その他

◎資料形態：全選択 原稿 書籍 書簡類 写真 図面 その他

とし、「活動の場」、「活動の内容」を第一の階層、活動の諸形態を第二の階層として、「検索」の対象とする構造とした。

岡正雄資料も同様に作業用シートにあたり、書誌番号・タイトル・関連人物・資料形態・言語、対象地域(大区分：地域)・対象地域(中区分：国)・対象地域(小区分：県)・対象地域(サブ区分：市町村)、年代、内容、備考のカテゴリーとして、資料状態・数量・カット数・撮影上の注意・作業ファイル名・撮影カット数などデジタル撮影と連動したものとした。資料形態が写真の場合、人物の同定=交流関係から学問形成との関連を考察しうる有益な情報であるが、個人情報にわたる資料もあるため、公開・非公開の設定も作業過程で判断しこの作業を進めた。

データベースの構造として、第一階層をテーマとして、「すべて アラスカ オーストリア農村調査関係 博士論文 その他」に区分し、第二階層として資料形態をもとに「全選択 フィールドノート 手帳 調査カード 日記 手稿 その他」として、構造化を行なった。

井上光貞資料は、『令集解の研究』執筆のための原稿類が箱ごとにまとめられている。資料はバインダーなどのファイルで原稿用紙がまとまった形態をとって原稿化が進んでいる『令集解の研究』グループと、ノート類・メモが中心となる資料形態をとる「その他資料」の二区分で作業用シートを作成し、デジタル撮影と並行して作業を進めた。

データベースの構造化にあたっては、前者の『令集解の研究』区分では、原稿の配列に従うことを原則として、(第一階層) 令の篇名・条文名、(第二階層) 養老令 唐令 大宝令 参考史料 語釈のカテゴリーを、後者の「その他資料」区分では、資料分類にもとづいて「全選択 令・篇名・条 参看史料 その他(ノート・原稿用紙等)」として構造化してデータベース構築を進めた。

構築された3つの資料群のデータベースは個別に選択できるように、図II-2-3のような3つの資料群全体のTOP画面をすえた。



【 図II-2-3 データベースのトップページ 】

以下、いくつかの検索事例の結果表示画面を掲げる。

図II-2-4は、杉原荘介資料である。事例は、テーマ：すべて、資料形態：写真、を検索対象とした結果表示画面の一つで、日本考古学協会 写真(=人物写真)として表示されるものである。検索結果で表示される画像はほかの2つのデータベースとともに拡大縮小可能とした。右の資料データ欄は、作業用シートで入力したテキストで情報を表示している。



杉原 荘介 資料 (考古学)  
 タイトル: (写真: 小林行雄・杉原荘介)  
 杉原荘介 資料 テーマ: すべて 資料形態: 写真



1 / 6  
 + - ↶ ↷ 🏠 🔄

資料データ	
ID:	269
作業番号:	06-22-02
分類1:	杉原個人
分類2:	写真
分類3:	杉原
資料形態:	写真
テーマ:	その他,交友,明治大学
資料内容:	行事
対象地域:	日本
対象地域:	
年代:	1956
表題:	(写真: 小林行雄・杉原荘介)
内容:	(写真: 小林行雄・杉原荘介), 3枚, (右から順に) 小林行雄・杉原荘介・大塚初重
差出人:	
請取人:	
関連人物:	小林行雄, 杉原荘介, 大塚初重
備考:	
所収:	
数量:	
その他:	
キーワード:	

【 図Ⅱ-2-4 杉原荘介資料データベースのトップページ 】

杉原荘介資料には、「テーマ：学問研究 資料形態：図面」で弥生土器図版、「テーマ：学問研究 資料形態：研究ノート」で旧石器時代研究ノート、また「テーマ：日本考古学協会 資料形態：その他スクラップ帳」で登呂遺跡調査特別委員会関連資料などの学史的にも貴重な資料も画像でみることができる。

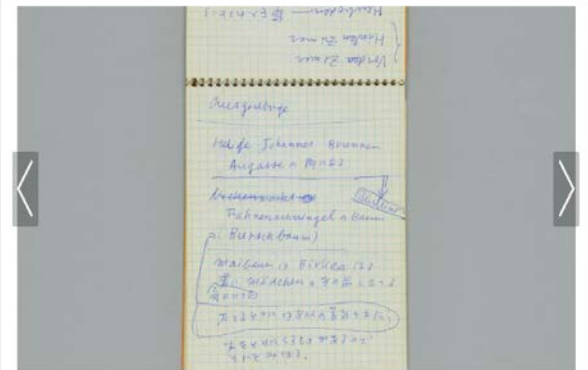
次の図Ⅱ-2-5は、岡正雄資料の事例である。「テーマ：オーストリア農村調査関係 資料形態：フィールドノート (Neckenmarkt 調査ノート) で検索した結果表示画面である。「テーマ：すべて 資料形態：調査カード」で稲取町調査カードが表示されるほか、キーワード検索でも「日記」で年次ごとの手帳(1971年日記)が表示される。これらは、彼の活動の足跡をたどることができる貴重な画像データを含む資料データベースとなっている。

図Ⅱ-2-6は井上光貞資料のうち『令集解の研究』区分の職員令中務省条の原稿を例示したものである。『令集解の研究』区分は、原稿化された資料形態であることから、令の篇名・条文名はプルダウンメニューで選択する方式として、画面右の「養老令」「唐令」「大宝令」「参考史料」のボタンを押すことにより自筆原稿の該当箇所を表示することができるようになっている。

「その他資料」の区分では、「令・篇名・条」「参看史料」「その他(ノート・原稿用紙等)」に加えて、フリーキーワードを含んで検索ができるようにしてある。図Ⅱ-2-7は、「参看史料」でフリーキーワード「木簡」で検索した結果を表示した画面である。1980年代初頭のまだ出土事例が限られていた段階でも井上氏が『令集解の研究』執筆に際して、広く出土文字資料にまで目を配って作業を進めていたのとも知ることができる。

杉原荘介・岡正雄・井上光貞資料データベース 明治大学 MEIJI UNIVERSITY サイトマップ 一覧へ

岡正雄 資料 (民族学・文化人類学)  
 タイトル: (フィールドノート)  
 岡正雄 資料 テーマ: オーストリア農村調査関係 資料形態: フィールドノート



4 / 30

資料データ

ID:	10
書誌番号:	RE14236
テーマ:	オーストリア農村調査関係
タイトル:	(フィールドノート)
関連人物:	
資料形態:	フィールドノート
言語:	日独語混合
対象地域 (大区):	ヨーロッパ
分: 地域:	
対象地域 (中区):	オーストリア
分: 国:	
対象地域 (小区):	フルゲンラント州
分: 県:	
対象地域 (サブ):	ネッケンマルクト
区分: 市町	
村:	
年代:	1970年
内容:	Neckenmarkt調査ノートか
数量:	
カット数:	
撮影カット数:	

一覧へ

【 図II-2-5 岡正雄資料データベース 】

杉原荘介・岡正雄・井上光貞資料データベース 明治大学 MEIJI UNIVERSITY サイトマップ TOPへ

井上光貞 資料 (令集解)

歴史学者 (1917.9.19 - 1983.2.27)。1942年東京帝国大学文学部国史学科卒。1946年文学部助手を経て、1949年東京大学教養学部講師、助教授。1961年文学部助教授、教授。1978年停年退官。同年、文化庁の国立歴史民俗博物館（仮称）設立準備室長。1981年国立歴史民俗博物館長。主著に、『井上光貞著作集』全11巻（岩波書店）。

『令集解の研究』凡例

①「令」をお選びください。  
職員令

②「職名・家」をお選びください。  
『令集解の研究』中務省  
『令集解の研究』中務省

目題 タイトル 目次・編忘

注解:  
 孫老令 忠令 大主令  
 参考史料 通訳

孫老令 1 / 6

【 図II-2-6 井上光貞資料データベース (1) 】





【 図Ⅱ-2-7 井上光貞資料データベース（2） 】

おわりに

5年間の新大型研究の取り組みによって、3つの資料群のデータベース構築の作業と2019年4月からの公開が射程に入ってきている。研究期間中に右表のようにデジタルデータ 23,632 コマとそれに付与したテキストデータによる「杉原荘介・岡正雄・井上光貞資料データベース」構築という「文化資源」の蓄積が達成された。

今後へ残された課題としては、この文化資源化されたデータの点検と追補が第一にあげられる。また、このデータベースのTOP画面にもある「古典籍資料データベース」

の充実がある。源氏物語関連典籍やその他古典籍など画像公開にとどまっている文化資源もあり、また「万葉集データベース」の完成も課題として残されているといえよう。これらの古典籍資料群を引き続き「杉原荘介・岡正雄・井上光貞資料」の3つの資料群データベースと一体的に運用する環境を構築することを通じて、考古学・日本史学・日本文学からなる日本古代学の構築への努力を続けていくことが第二の課題である。さらに第三には、「どのような利用・活用の実現をイメージしてデータベースを構築

【 表Ⅱ-2-1 本研究によるデジタルデータ数 】

No.	カテゴリ	種別	年度	カット数
1	a	杉原	28年度1	3,856
2	a	杉原	28年度2	1,899
3	b	岡	26年度	2,281
4	b	岡	28年度	1,181
5	b	岡	29年度	3,524
6	c	井上	26年度	2,716
7	c	井上	27年度1	3,020
8	c	井上	27年度2	4,545
9	d	花鳥芳囀	29年度	61
10	d	源氏物語聞録	29年度	483
11	d	うなみ松	29年度	22
12	d	文珠の本地（梵天国）	29年度	44
	総コマ数			23,632

するのか」という文化資源を活用する研究資源化の課題について、国内外の利用者との双方向の協働も求められている。これらの課題の遂行により、日本古代学研究の学術基盤の強化をはかっていくことが次の目標である。

(加藤 友康)